●モノグラフ 小学生ナウ

子どもと祖父母

vol.4-6

©1984(株)福武書店 教育研究所/加藤智禮・和田京子

東京学芸大学助教授 深谷和子
大妻女子大学研究生 今野恵子

目次

特集／老化と成熟 …… 2

調査レポート／子どもと祖父母

要　約 …… 6

1.子どもたちの祖父母 …… 8
- 祖父母の有無 …… 8
- 祖父母との接触 …… 11

2.祖父母をどう理解しているか …… 13
- 祖父母の名前と職業 …… 13
- 祖父母たちの人生について …… 15
- どんな子どもだったか …… 17
- 祖父母は幸せか …… 21

3.祖父母は愛されているか …… 22
- 祖父母を好きか …… 22
- 祖父母と一緒に暮らしたいか …… 25

シリーズ／講座・子ども調査入門⑥
設問文のつくり方 …… 28

資料1　調査票見本 …… 33
資料2　学年・性別集計表 …… 42

老化と成熟

東京学芸大学助教授　深谷和子

欧米の老人たち

欧米を旅して目につくのは、その清潔で美しい街の風景の中で、なんとも異和感を感じる部分――駅の周辺や公園のベンチに座る、疲れや退屈を全身ににじませた暗い老人たちの姿である。レストランに入っても、片隅にひとり座って、ゆっくりと、実にゆっくりと食事をする老人たちの姿がある。欧米のレストランは、日本とちがってカップルで入る習慣がある場所だ。カフェテリヤのような店は別として、ふつうのレストランでは、実に楽しげに談笑しながら食事をとる人びとが一般的だ。だから、1人で食事している姿に出会うと、どうして1人なのだろう、配偶者はむろんのこと、しかるべき女友だちや男友だちの1人すらいないのだろうか、気の毒に、ということになってしまう。だから本人だってひどく居心地が悪いだろうに、それにもかかわらず、毎晩同じ時刻に同じ席で食事をとる老人の姿を見かけたりする。何年もの間、ずうっと通ってきている常連なので、ウエイターもその席を確保しておくのだろう。ともかく外国で出会う老人たちには、一様に暗く不幸で孤独な感じがつきまとう。

日本の老人たち

それにくらべると日本の老人たちには、それほど暗くみじめな感じがない。日本でお年寄りと言えば、なんとなく家族と一緒の情景を思い浮かべる。さすがに子どもが独立した後で、老夫婦だけで暮らす人びとは増えてきたが、われわれの周囲に、1人暮らしの老人は、現在、まだそれほど多くない。公園でも、老人たちだけでベンチに座る姿よりも、乳母車を押したり、孫を遊ばせたりといった姿のほうがずっと一般的な風景である。よい意味での家族制度が残っているというべきか。それとも、親も子も、相互にベタベタした関係のままにすごしていくという親子の間の未成熟な関係が、老後においてはひとつのメリットとして働くことを意味しているのだろうか。

しかし考えてみると、今70歳80歳の老人たちと一緒に暮らしている子どもたちは、40代か50代。つまり、いわば古きよき時代の家庭に育ち、道徳教育を受けてきた、親に対して従順で親孝行な人びとである。だから、それぞれの家庭に入ってみれば、老人たちと若い世代の間にはけっこうトラブルや対立があるのかもしれないが、それでも、一緒に住むことが親のためでもあり、人の道なのだと思って、そばにいてくれるのかもしれないのだ。同じことを、今後子の世代に期待できるかどうか。おそらくダメだろう。いまのおとなたちが年老いた時、子や孫の世代がどう対応してくれるかは、まったく保証の限りではない。地下鉄のベンチに終日座りつづける老人の姿が、われわれの将来の姿でないとは、誰も断言できないのである。

老化の15の指標

とするとわれわれは、1人で強く生きていく道を選ぶか、それとも(「いたわり」や「同情」のように、あてにならないものによって家族の中に置いてもらうことを期待するのでなく)もっと積極的に人びとから「愛される」、または「敬愛される」老人にむけて自己形成をしていくか。いずれかを選択しなければならないだろう。しかも手遅れにならないうちに、若いころからである。

この2つの道のうち、欧米の人びとなら、ためらいなく前者を選ぶだろう。彼らは幼いころから、なによりも「独立心」をもつ強い存在に向けて、社会化されるからである。孤独が好きなはずはないであろうが、それでも孤独に耐えるだけのバックボーンを若い時から作り上げて、たいていの老人たちがもっているからである。

しかし、日本人はどうもダメそうだ。これだけ親にベタベタされて育てられたわれわれは、とうてい「孤独に耐えても、自立を選ぶ」ことなどできそうにない。とすると、何としてでも、その内部に人間的な魅力を育て上げた上で、年をとらなければならないだろう。

ところが一般的に、年をとると人間は、どうしても若い人びとから疎まれる行動様式へ傾斜していく。すなわち精神的行動的な「老化」である。身体的生理的に老化していくのは防げなくとも、精神的行動的に老化することは、できるだけ防がねばならない。それが、高齢化社会と名づけられるような老年人口の多い今後の社会に、大切な課題となるだろう。では、精神の「老化」とは何だろうか。

例えばキャバンという学者は、1949年に人間の精神的老化の指標として次の15項目をあげている。

1. 最近のことを忘れやすい
2. 急ぐ時イライラする
3. 自己中心的
4. 昔のことを話したがる
5. ぐちが多い
6. 目の前のことをあまり気にしない
7. ひとりで、他人にわずらわされずにい

ることを好む
8．新しい学習がむずかしい
9．騒々しいことに対して神経質
10．他人との交際におくびょうになる
11．社会の変化に対して疑い深い
12．自分自身の感情に関心をもつ
13．昔自分のした苦労を話す
14．計画を変えにくい
15．つまらないものを集める

いわば新しい環境への適応力がなく、冒険を好まず、自己中心的、とでもまとめられようか。若い者たちがとかく老人を疎みがちなのは、適応力が大きく、新しいもの大きなものへのチャレンジ精神が旺盛で、刻々と自己を成長（変化）させていくことをなによりも特徴としている世代にとって、この老人的特性は、あらゆる意味で彼らと正反対のものだからだろう。

成熟したパーソナリティー

しかし他方で、われわれはこうも考える。もし人間が精神的に老化することがなく、あらゆる年齢の人びとがみな若々しく、すなわち人生に対して常に挑戦的で、安定より変化

を好むパーソナリティーのもち主であったらどうだろう。世の中は、おそらく秩序を欠いた不安定なものになってしまうのではなかろうか。ひたすら変化を好む若い生き物と、安定を好み、過去をふり返って、これからの生き方の指針にしようとする老いた生き物とが、相互に調和をとって暮らすことで、世界はバランスがとれていくのかもしれない。

そういう観点でこれらの15項目を眺めると、これらがつくりだすパーソナリティー像は、おだやかでひかえめ、感情のきめの細かさや安定感といった特徴をも含む、ポジティブな側面をもつものである点に気づく。そうした性格特性を、もっと評価できないだろうか。すなわち「成熟した人格」という概念である。成熟と老化は、同じだろうか。それともどこかが違うのだろうか。

「成熟した」人格を問題にしようとする時、問題になるのは、「成熟した」という概念が何をさすのかであろう。たしかにわれわれは、多くの人びとと接して、「未成熟な」パーソナリティーのもち主と「成熟した」パーソナリティーのもち主とを、なんとなく弁別することができる。とくに「未成熟」の概念を、自己中心的、安定しない、感情的などというイメージでとらえることは容易そうである。臨床的にも、登校拒否をはじめとする問題のケースには、未成熟な母親がひとつの要因として関わっていることはしばしば体験される。しかし、この反対の概念である「成熟した」パーソナリティーは、イメージとしてはわかるのだが、どうも定義するのがむずかしそうである。

この問題は心理学者たちにも関心をもたれてきているが、ここではオルポートによって説明されている概念を紹介しよう。

彼によれば、成熟したパーソナリティーとは、

(1)自己感覚の拡大

自分自身が所属する（精神的に住んでいる、

または自分の場としてとらえている）世界の広さである。これは実際に自分が行動的にかかわっていることもあり、ただ自分の内的世界の中で、一方的に関わっていると感じているだけのこともありそうだ。

(2)他人との暖かいつながりがもてる

たとえ愛情から出発したものであっても、他人を所有したり支配しようとしたりする態度ではなく、他人を自分とは別の人格として尊重しながらも、「さりげなく誠実に」見守りつづけること、である。

(3)自己受容

自分の内にある情緒（怒りや怖れ、性的な衝動など）を、自分のものとして受け入れることができるか。それらを自分のものであると認めても、混乱したり自己否定したりせずに、ありのままの自分とつきあっていけるかどうか。換言すれば、情緒的に安定しているかどうか、である。

(4)現実的な知覚

自分の周囲の状況を、客観的に把握し、適切に問題を解決していく能力があるかどうか。

(5)自己の対象化

自分自身を１つの対象として、客観的にとらえることができるかどうか。ユーモアというのは、自分を笑うことのできる能力のことだと言われるが、いわばそのように、自己を客観化して見られる能力があるか、自分自身にゆとりと距離をもって接触していけるかどうか、である。

(6)統一的な人生哲学

生きていく上で、１つの中心的原理をもっているかどうか。個人的信条、生きる目標、人生観のようなものが確立しているかどうか、である。

こうした概念で一応「成熟した」パーソナリティーをとらえてみると、たしかに「老化」と「成熟」とは、似ているようでいて、かなりの違いをもつもののようである。一番のちがいは、成熟とは「広がり」であり、老化は「狭くなる」ことを意味する部分であるのかもしれない。とすると、若いころにできるだけ「成熟した人格」を形成しておくことが、年とってから若い人びとにうとまれる「狭さ」、すなわち「老化」を多少とも防ぐ手だてになるのだろう。

新しい発達課題

かつて平均寿命が今よりはるかに短かかった時代に、人びとは、成人して一定期間の社会的活躍を果たした後、あっという間に、その生を終えてしまった。多くの場合、「老後」に対する対応策をあまり考える必要がなかったとも言えるだろう。しかし現代のように「長い長い」老後が用意されている時代には、われわれは長期間をかけて、「老化」や「老後」に対する準備をしていかねばならない。それは、おとなたちに対して与えられた大きくて新しい「発達課題」であると同時に、幼い者に対しても、これまで以上に与えられなければならない教育の重要な領域ではなかろうか。

調査レポート／子どもと祖父母

東京学芸大学助教授　深谷和子
大妻女子大学研究生　今野恵子

① 高い祖父母の生存率

祖父の生存率は父方で46%、母方で59%。祖母は同じく77%、84%と、共に高い生存率を示している(図1)。

② 同居しているのは

父方の祖父母と同居しているのは33%、母方とは11%だが、「近所に住んでいる」を含めると、身近に祖父母がいる子はかなりの割合にのぼる(図3)。

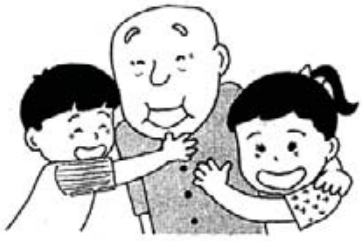
③ お年玉と誕生日プレゼント

祖父母からお年玉を毎年（だいたい）もらうのは、父方から83%、母方から87%。これでは貯金の金額も増えていくはずである。また、誕生日プレゼントをもらう子も、同じく35%と41%。わずかながら遠方にいる母方からの心づかいのほうが多い(図6、図7)。

④ 祖父母の名を知らない

しかし、子どもたちは祖父母の名や若いころの職業や子ども時代のようすなど、祖父母についての知識に大きく欠けている。老人たちは幼い者に対する昔語りをやめてしまったのだろうか（図8、図9、図10、図11～図14）。

⑤ 幸せな老後



子どもたちは祖父母の現在の状況を、ほぼ幸せとみている。子どもたち自身も祖父母をかなり好きだし、できれば一緒か、または近所に住みたいと思っている子も多い（図15、図16、図19）。

⑥ しかし学年と共に

祖父母と一緒に住みたいと思っている子どもたちは、しかし、学年とともにしだいに減っていく（図20）。

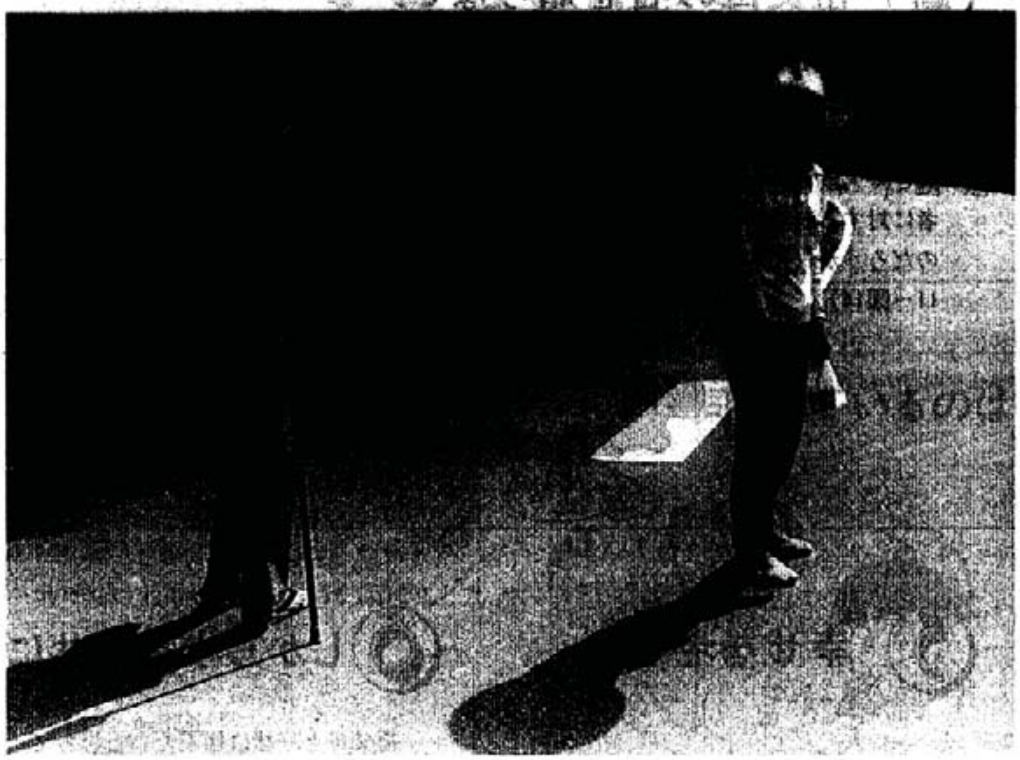
サンプル数　（人）

学年／性	男子	女子	計
4年	299	253	552
5年	274	240	514
6年	307	292	599
計	880	785	1,665

調査概要

対象●宮城・神奈川・静岡・東京の小学校4～6年生
時期●昭和59年2月
方法●学校通しによる質問紙調査

1. 子どもたちの祖父母



高齢化社会が到来したと言われる中で、幼い世代や若い世代と老人たちが、いかに幸せに、また相互に調和的に暮らしていくかは、いまやビッグな社会的課題となりつつある。本レポートは、現代の子どもとその祖父母との関係について、子どもたちから得たアンケート調査のデータをもとに、この問題を考えてみようとするものである。現在日本の老人と子どもたちとの関係は、いったいどうなっているのだろう。大きなジェネレーションギャップのある者たちが、それぞれお互いに理解し合い、敬愛し合って暮らす姿があるのだろうか。

祖父母の有無

まず子どもたちには、今、どのくらいの割合で祖父母がいるのだろうか。かつて平均寿命がはるかに短かった時代には、しばしば祖父母は、人びとの幼児期の記憶の中に登場するだけだった。祖父母の存在がわれわれの人間形成に影響するほどの期間を、不幸にしてほとんどもたなかったと言えそうだ。では、現代においてはどうか。

図1は祖父母の生存率である。祖父が5割前後、祖母が8割前後と、祖父母のいる子どもたちは、かなりの割合にのぼっている。また父方と母方では、やはり母方の祖父母の生存率が高い。またその年齢だが、**図2**に示したように、とくに祖母では64歳以下の若い祖

母も多く、父方で32%、母方で40%にも達する。全体としては60代後半から70代前半の老人たちが一般的な年齢層と言えるだろう。

次に図3は、祖父母の居住地である。父方

図1・祖父母の有無

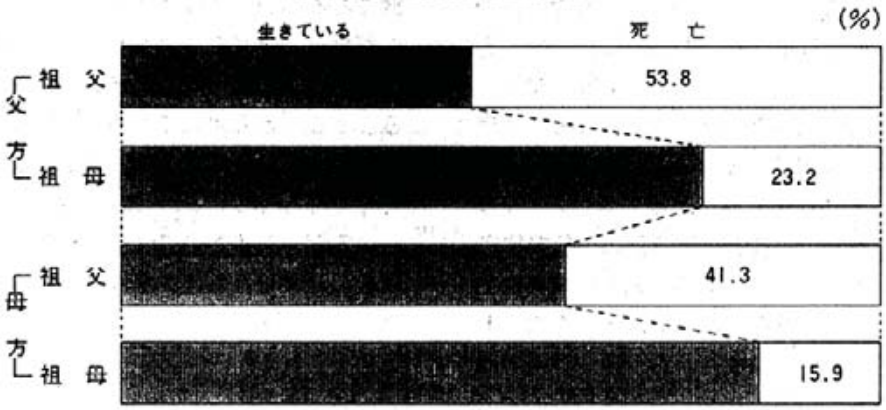
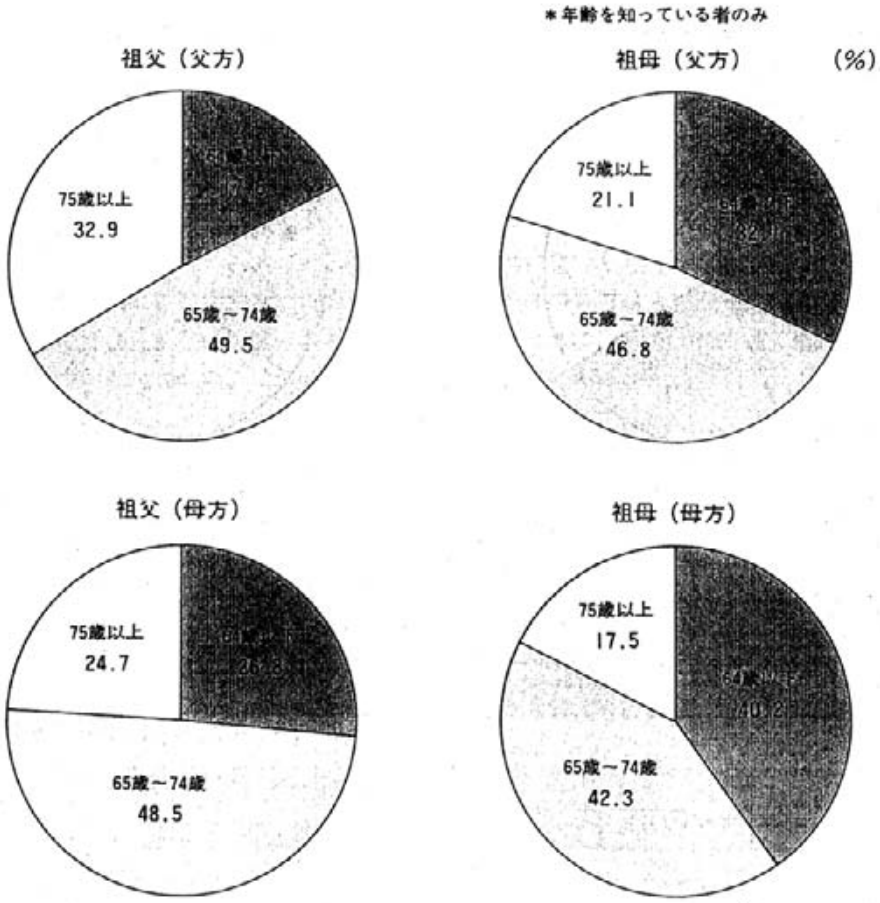


図2・祖父母の年齢*



祖父母と同居している子どもが3割。母方祖父母と同居している子が1割。思ったより父方と母方の差が少ない。種々の事情から、母方であってもこだわらず同居する家族が増えてきていることを示す資料かもしれない。

しかし同居はともかく、近所に住んでいる祖父母の割合はけっこう多い。父方で23%、母方で28%。同居と合わせると、父方では半分以上が、母方でも3分の1が、子どもの近くに住んでいることがわかる。本サンプルは大まかに言って、神奈川県藤沢市の新興住宅地の子どもが4割、静岡県の同じく新興住宅地が2割、宮城県郡部の商業地域が3割、1割が東京、という構成だから、地域が違えばまた少し数字は変わってくるだろうが、この数字は、けっこう子どもたちの近くで祖父母の生活が展開されており、接触もそれなりにされている可能性を示すものだろう。

また図4は、生存している祖父母の健康状態である。病気で寝たり起きたりの祖父母は1割以下。祖父の3～4割はまだ現役で仕事をしており、祖母の2割強は仕事についている。少なくとも元気で生活している者は全体の7～8割に達している。健康かどうか、何をして暮らしているか、知らない、と答えた子もいるが、全体としては1割程度にすぎない。現代の祖父母たちは、意外に元気でカクシャクとしたイメージで、子どもたちの中にあると考えられる。

図3・祖父母の居住地

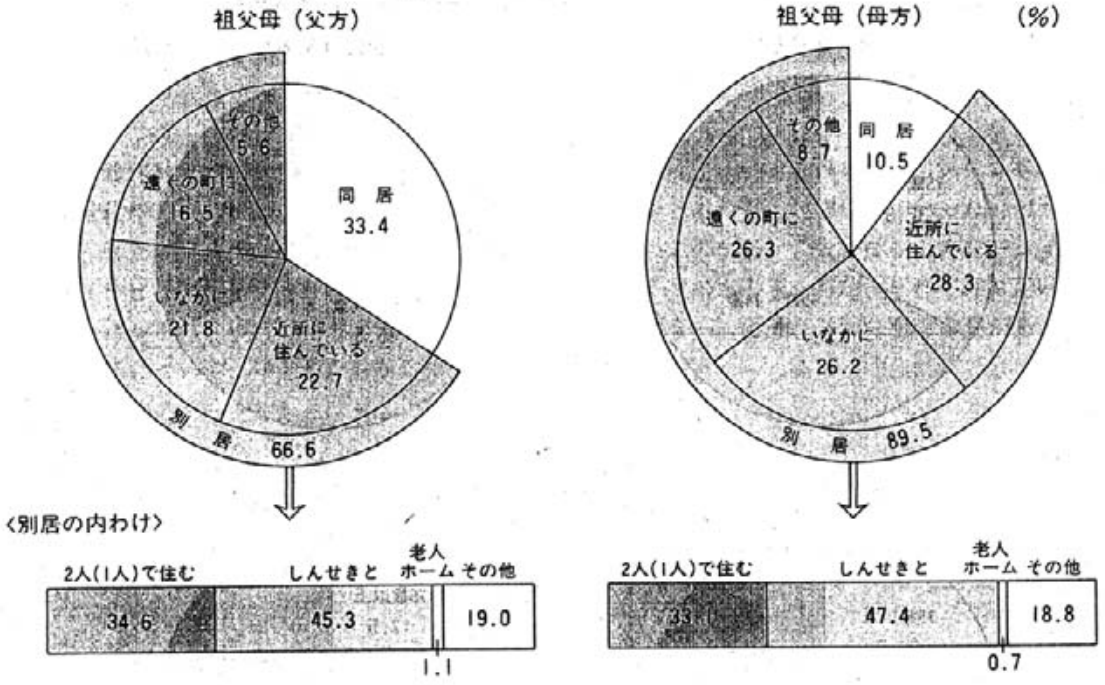
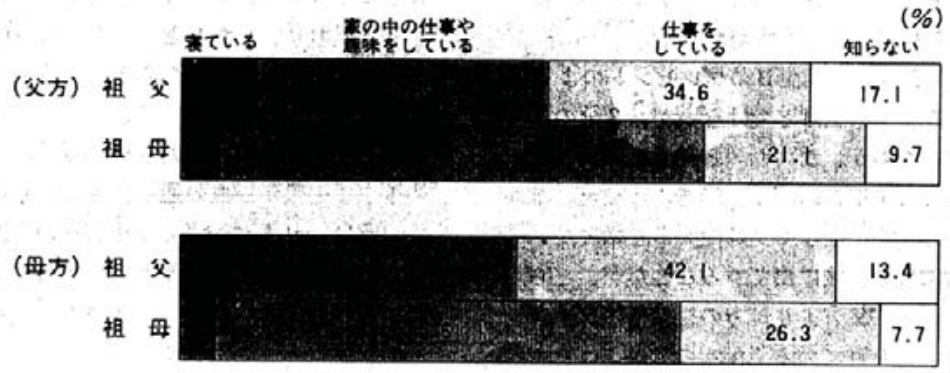


図4・祖父母の健康状態

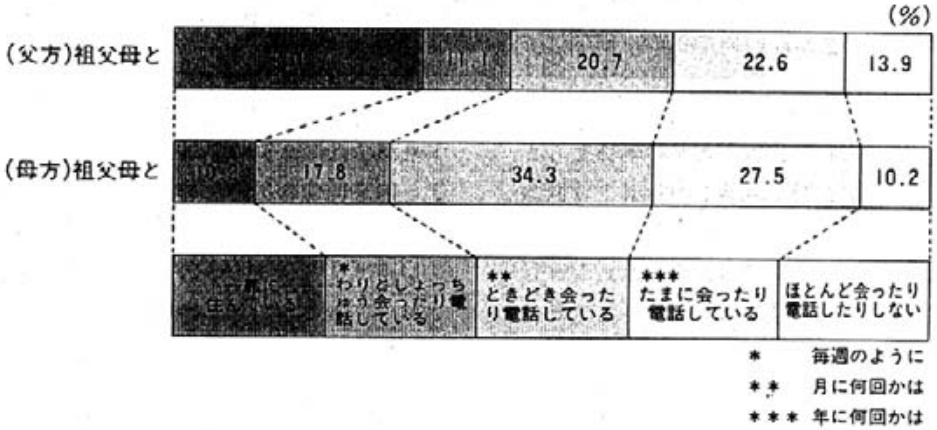


祖父母との接触

さて、意外に近くで元気に暮らしているようすの祖父母と子どもたちは、いったいどのくらい接触しているのだろう。**図5**はまずその頻度である。図が示すように「ほとんど行き来のない」のも全体の1割強あるが、他はけっこう行き来があることがわかる。

さて祖父母と孫たちとのコミュニケーションと言えば、まずお年玉やプレゼントの情景を思い浮かべる。老人にとっても孫たちにとっても、こうした交流のしかたが、お互いにその愛情を確認し合ういちばん楽しい時であり、場であるのかもしれない。この点をみたのが**図6**、**図7**である。まずお年玉だが、どちらの祖父母からにせよ、「毎年もらう」のが約7割。すでにみてきたように、同居も含めて、近くに住んでいるのは父方で56%、母方で39%だから、多少遠方でも訪問し合っているか、または手紙などで送ってまでも、孫たちにお年玉を欠かさないようにしている老人たちの姿が浮かび上がる。そして、これに「だいたいもらう」を含めると、こうしたやりとりの努力は8割を超える。また、図3でみたように、父方よりも遠く離れている母方の祖父母のほうが、孫たちと、むしろより多い

図5・祖父母とどのくらい接触しているか



割合でお年玉を与えていることもみいだされる。老人たちが孫たちとのきずなをつくるべく努力しているようすがわかる。

また図7は、誕生日のプレゼントのようすである。お年玉ほどではないが、3分の1の子どもたちが、だいたい毎年もらっている。これもお年玉と同じく、母方の祖父母のほうが、むしろより多くプレゼントを贈っている傾向にある。後に出てくることだが、どちらかと言えば父方より母方の祖父母のほうが、愛着をもたれている気配なのは、こうした努力のせいもあるのだろうか。

以上みてきたように、平均寿命が大幅に増大した今日では、子どもたちの多くが祖父母をもっており、しかも老人たちが比較的元気で生活し、けっこう孫たちとの交流もしているようすが浮かび上がってきた。すなわち、形や行動としては、老人と孫たちとの間に心のきずなや暖かい血の通った交流があるように見うけられる。では、もう少しその人間関係の内容に入っていってみよう。老人と孫たちの間の相互理解や愛情は、どの程度に確かなものなのだろう。

図6・祖父母からお年玉をもらうか

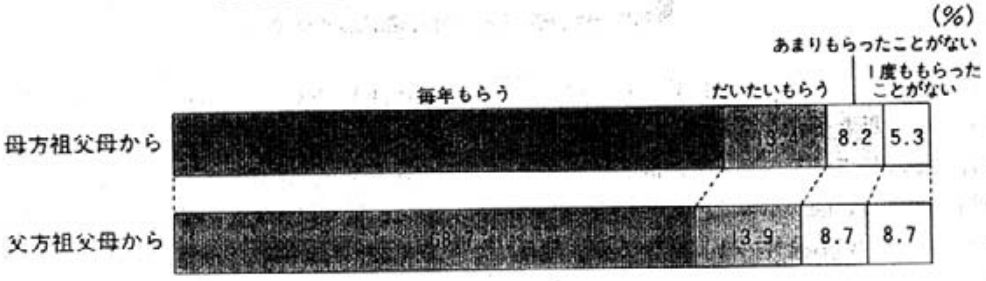
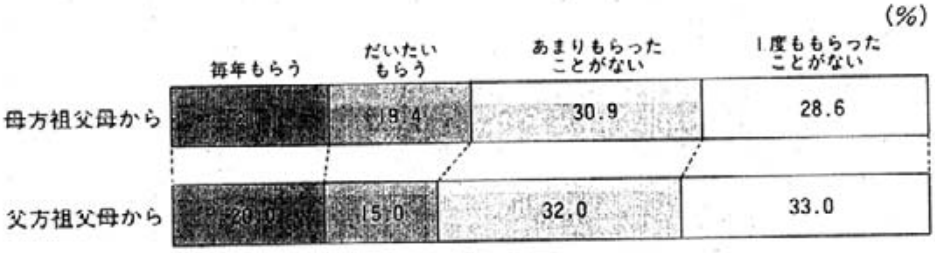
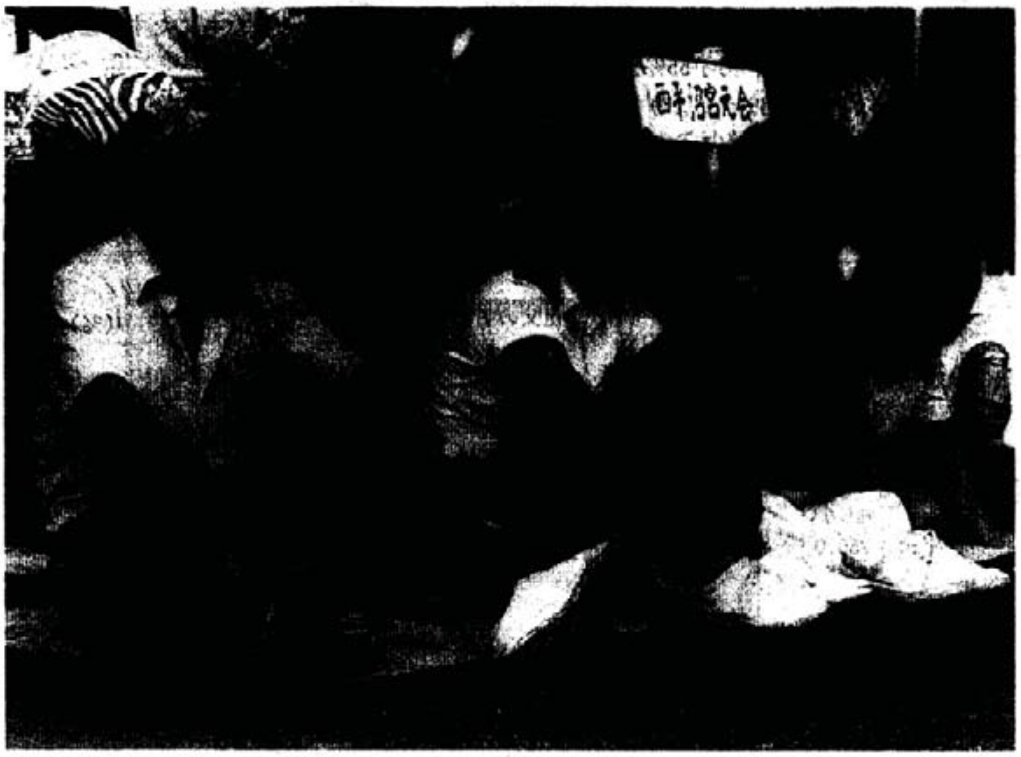


図7・祖父母からお誕生日のプレゼントをもらうか



2. 祖父母をどう理解しているか



まずはじめに、子どもたちが祖父母の人となりをどのくらいよく知っているか、みてみよう。人間相互の理解のうち、最も基本的なものは、「名前」と「職業」だろう。初対面の人物同士がかわす名刺にだって、この2つが書かれている。子どもたちは、祖父母の名前や若いころの職業について、どのくらい知っているのだろうか。また祖父母の若い日々の活躍ぶりを、どのくらい語り聞かされているのだろう。そしてその結果、祖父母について、これまでどんな人生を生きてきた人だとのイメージを抱いているのだろうか。

祖父母の名前と職業

図8は、子どもたちが祖父母の名前をどのくらい知っているかについてたずねた結果である。図が示すように、祖父の名前を知っている者は、父方母方ともわずか5割。祖母はややそれを上回るものの、それでも6割にすぎない。この数字はあまりに低すぎないだろうか。むろん、早くに死亡してしまった場合など、名前を知る機会の少なかったこともあるかもしれないが、それでも祖母に例をとると、生存率は父方で77%、母方で84%。これに対して知名率は60%と63%である。生きていても名を知らぬままにすごしている場合が、けっこうあることになる。

また、どういうわけか、男子より女子のほうが、祖父母の名をよく知っている傾向がある。巻末の集計表によれば、父方祖父につい

ては両方とも50%と変わらないが、父方祖母については、男子57%、女子64%。母方祖父については男子44%、女子55%。母方祖母に至ってはさらに差が生じ、男子55%、女子71%となっている。女子のほうがより祖父母に愛着や関心をもっているのだろうか。

では、名前以外の個人的属性についてはどうなのだろう。図9は、祖父の若いころの職業について、子どもたちにたずねた結果である。

ここでも祖父の職業は半数を超える子どもが「知らない」と答えている。祖父は孫たち

図8 祖父母の名前

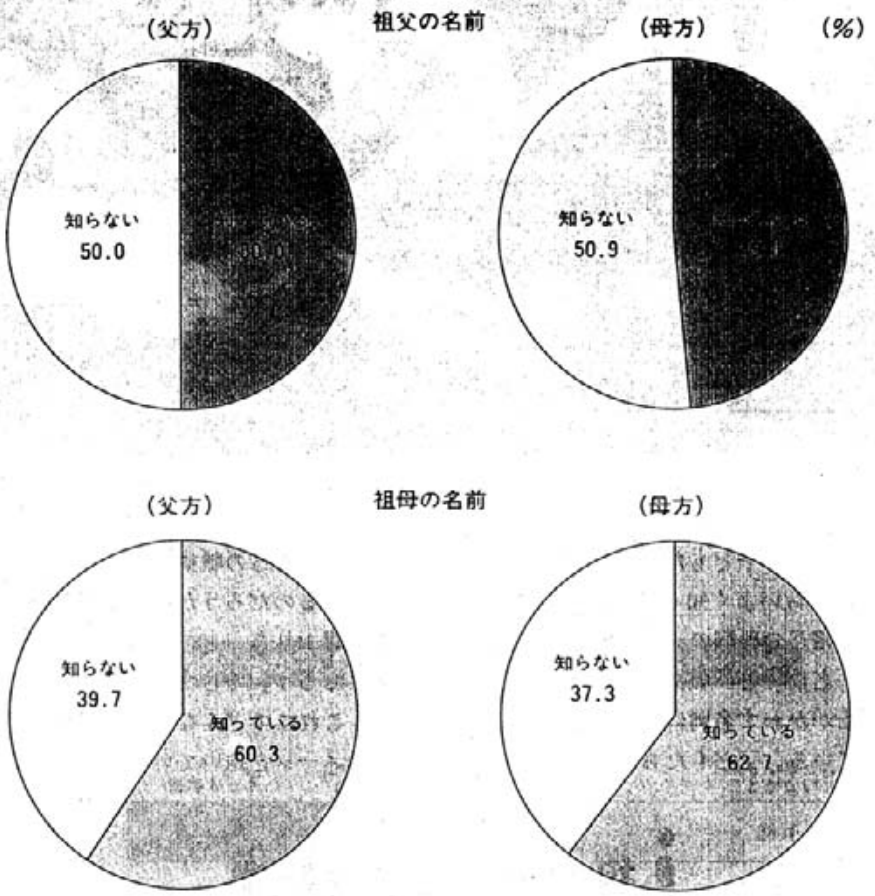
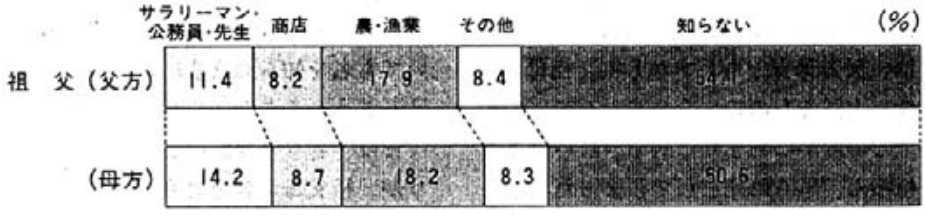


図9 祖父の若いころの仕事



に自分の歩いてきた道、若いころの数々の体験やエピソードなどを語る機会をもたないのだろうか。ただし、さすがに学年が上昇するにつれて、祖父の職業を知っている子どもたちは増えていく。巻末の集計表によれば、知っていると答えた者は、4年、5年、6年と学年が進むにつれて、父方祖父の場合は38%、45%、55%、母方祖父の場合は42%、48%、57%と増加している。

それにしても老人たちは、幼い者たちに、もっと、自分や自分の人生を語ることがあってもいいのではないだろうか。

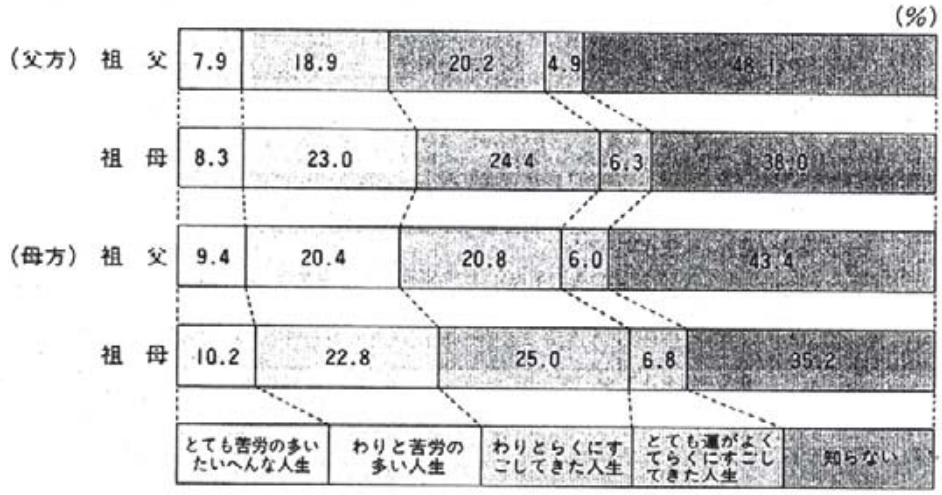
祖父母たちの人生について

祖父母の名や職業について、あまりにも知らなさすぎると嘆きたくなる状態を、われわれは子どもたちの上にみてきたわけだが、それでは、祖父母がこれまで歩いてきた人生は、どのようなイメージで子どもたちにとらえられているのだろうか。58年度にＮＨＫの朝のドラマで天下の涙をしぼらせた「おしん」のような苦難の人生のイメージか、それとも、自分たちのように楽しく幸せにすごしてきた人びととして、とらえられているのだろうか。

図10をみてまず目につくのは、ここでもまた「知らない」の割合の多さである。祖父については5割弱、祖母については4割弱が「知らない」と答えている。（おもしろいのは、ここでも男子より女子のほうが、やや祖父母の人生のイメージをもっている割合が高い。先に名前の項でみたように、どうやら男子より女子のほうに、祖父母に対する理解が見られるのは、ほんとうのようである）。

しかしわれわれがここで聞いているのは、「名前」や「職業」のような、祖父母についての「知識」ではなくて、単なるイメージである点を考えてみなければならない。知識とちがって、正確には知らなくとも、せめて「大変だったらしい」、または「わりと恵まれた人生だったらしい」ぐらいの、大まかな印象ぐ

図10・祖父母の人生に対するイメージ



らいもっていてもよさそうなものである。それすら思い浮かばないとは、いかに子どもたちが、祖父母についての個人的情報にふれていないかを示すものだろう。おそらく現代の祖父母たちは、孫と接触しても昔語りをするのを遠慮し、また孫たちも、お年玉をくれる「おじいちゃん、おばあちゃん」には関心があっても、人生の先達としての祖父母については、ほとんど関心をもたないのだろう。しかし、人生をスタートしたばかりの子どもたちにとって、せっかく身近に（または心理的に身近に）、大きな経験や知識の宝庫をかかえた人生の先輩たちがいるというのに、なんともったいないことだろう。

またもうひとつ気になるのは、祖父母の人生をほぼイメージできる6割前後の子どもたちの中にも、意外に「苦労の多い人生」というイメージが薄いことだ。「苦労の多い」と「わりと楽な」の比率をみてみると、

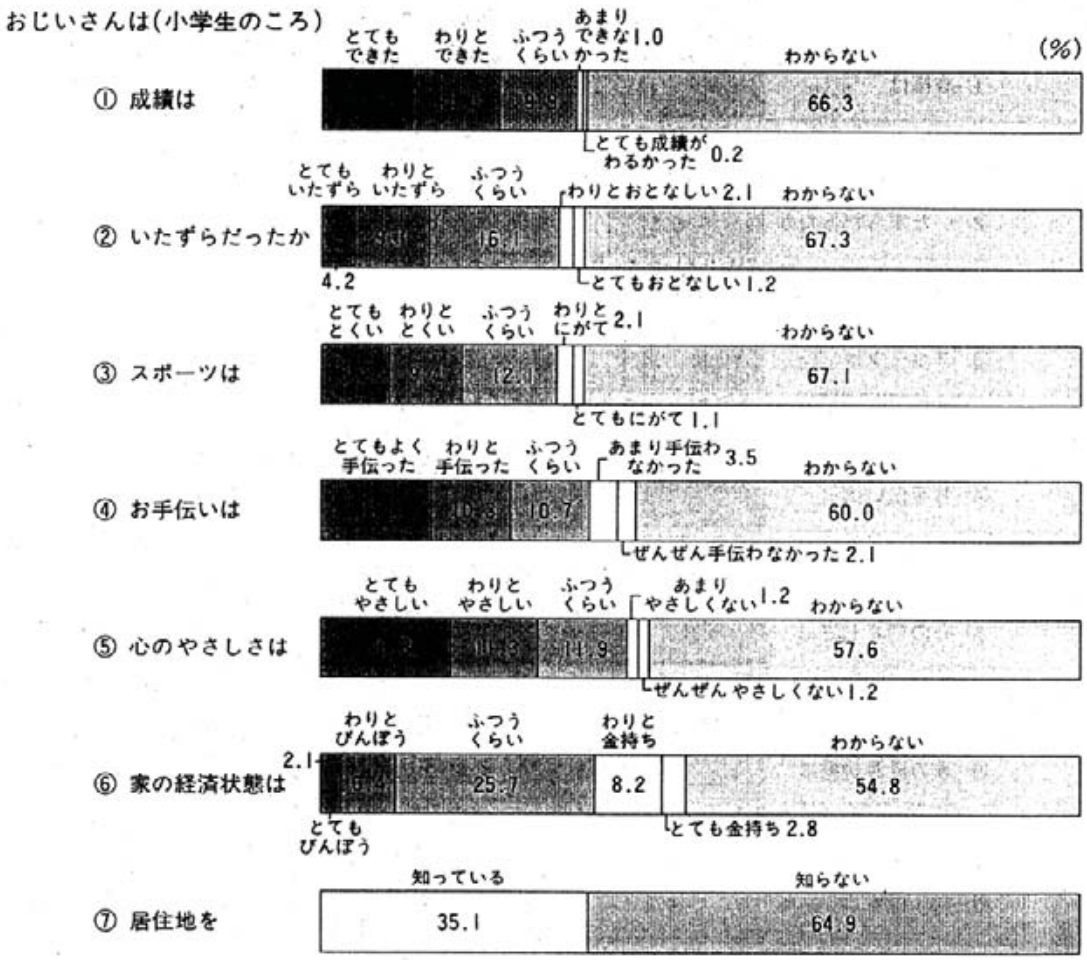
		〈苦労の多い〉	〈わりと楽な〉
（父方）	祖父	26.8%	25.1%
	祖母	31.3%	30.7%
（母方）	祖父	29.8%	26.8%
	祖母	33.0%	31.8%

のように、ほとんど比率が変わらない。しかし考えてみると、この祖父母たちの生きてきた時代は、いくつもの戦争のあった時代である。すべての人々の歩んできた道が苦難の連続であったと表現しても、オーバーではないだろう。とすると、ここでもやはり祖父母たちが、故意に口をつぐんで、自分の過去を孫たちに語らないままにいる姿が浮かび上がってくると言えそうだ。

どんな子どもだったか

さて次は、祖父母について子どもたちが抱いている「愛着」や「敬意」のようすを探ってみよう。**図11**から**図14**までは、祖父母のそれぞれについて「子ども時代はどんな子だったと思いますか」とたずねた結果である。すなわち、もし祖父母の昔の姿をまったく知らなくても、現在の（または生前の）祖父母が頭がよくてもの知りだと感じていれば、おそらく子どもたちは「自分と同じくらいの年齢のころも、きっと成績がいい子だったに違いない」と答えるだろうし、年に似合わず運動神経の片鱗が感じられれば、「きっとスポーツの得意な子だっただろう」と想像するだろう。心が優しい祖父母であると思っていれば、「心が優しく、お手伝いをよくした子だった」というイメージでとらえるのではないか。さら

図11・祖父のイメージ（父方）



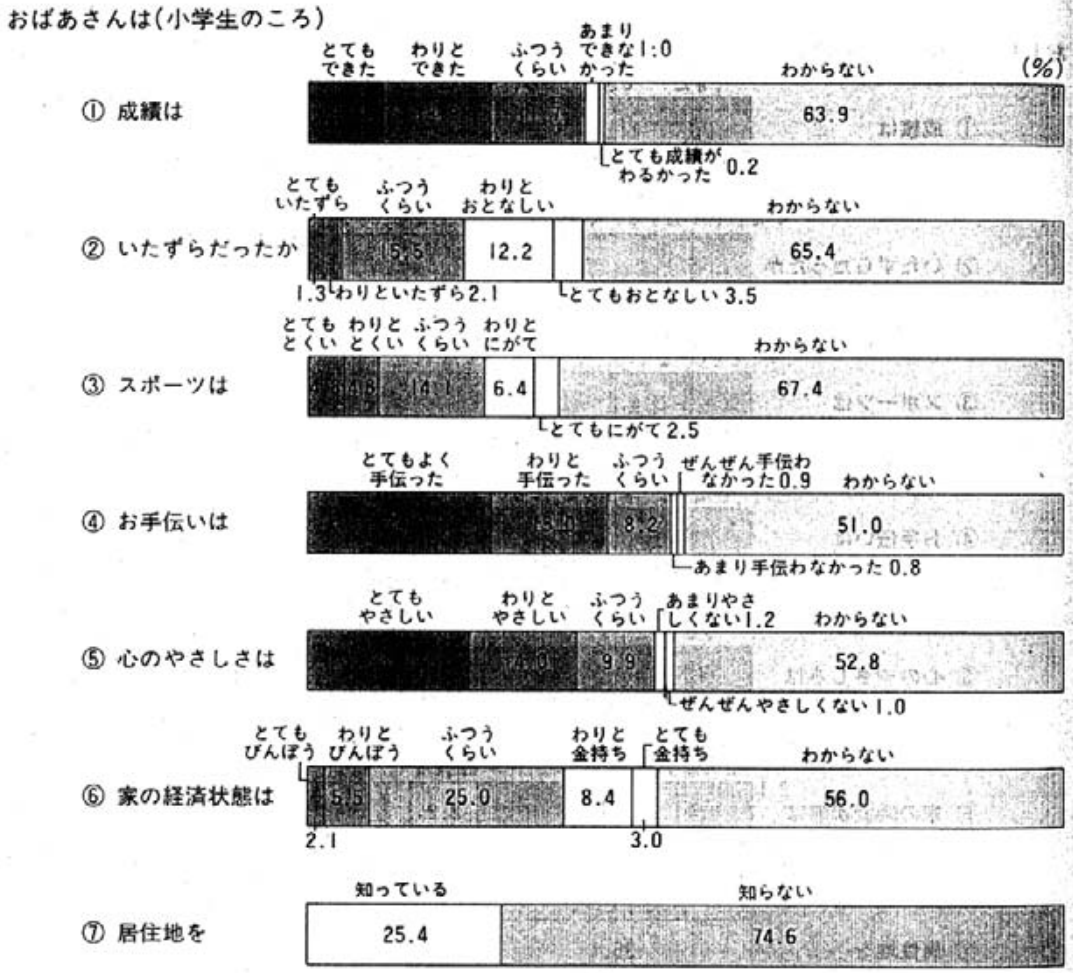
に、ジョークのわかる機敏で若わかしい精神をもつ祖父母なら、「いたずらっ子だっただろう」と考えても不思議ではないように思われる。

とすれば、「経済状態」と「居住地」を除いた5つの項目は、祖父母に対して人間的な愛着や敬意をもっているかどうかのバロメーターとして使うこともできそうである。

このような仮定の下にデータをみてみると、ここでも、「わからない」という答えがきわめて多いことに、まず気がつく。

すでにみてきたように、祖父母について、その名前も職業も知らず、どんな人生を送ってきたかについてのイメージすら浮かばない子どもたちが多かったのだから、まして「おじいさんおばあさんの子どものころ」と言われても、とまどうのは無理もないかもしれない。しかしそれにしても、「わからない」という答えは多すぎるのではないか。老人たちが昔語りをしなくなっているのはわかるが、楽しかった子ども時代の思い出の一片すら、現代の老人たちは孫たちに語り伝えることを

図12 祖母のイメージ(父方)



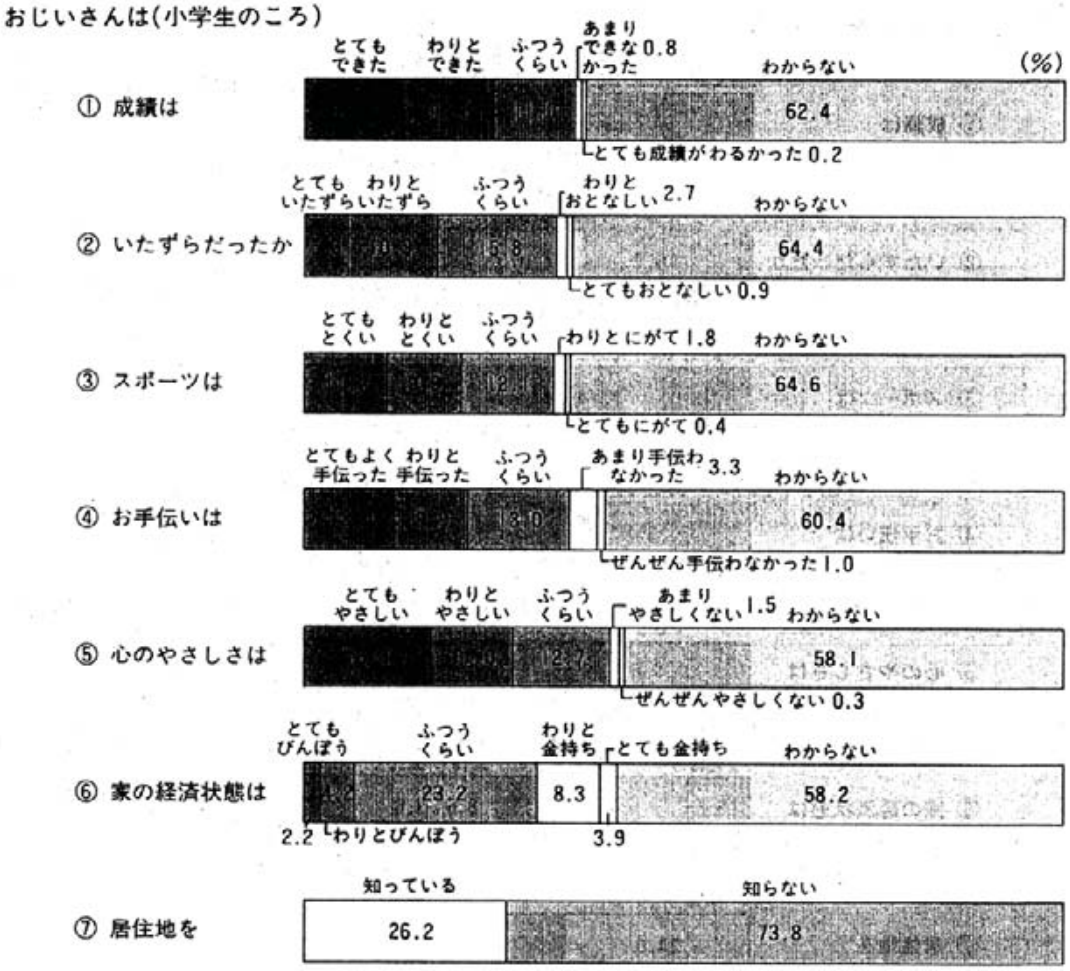
していないとは。

こうしたイメージの稀薄さの中で、比較的子どもたちが輪郭をつかんでいるのは、「心の優しさ」と「家庭の経済状態」であり、とくに祖母については、「手伝いをよくする女の子だった」の部分であることが、図から読みとれる。これらはいずれも、自分たちによくプレゼントをくれたり、毎日家事をよくしている祖父母の現在の姿からの類推であろう。とすると、先のわれわれの仮定、すなわち、これらの項目に対する反応を、現在の祖父母への評価の反映されたものとしてとらえることは、ほぼ可能であるように思われる。

さてそうした視点でこれらのデータをみていくと、どの項目においても、祖父母の子ども時代について、かなり好意的な評価がされていることに気づく。たとえば「学校の成績」については、

	〈ふつう以上〉	〈ふつう〉	〈ふつう以下〉
(父方)祖父	22.6%	9.9%	1.2%
祖母	23.2%	11.7%	1.2%
(母方)祖父	25.6%	11.0%	1.0%

図13 祖父のイメージ(母方)

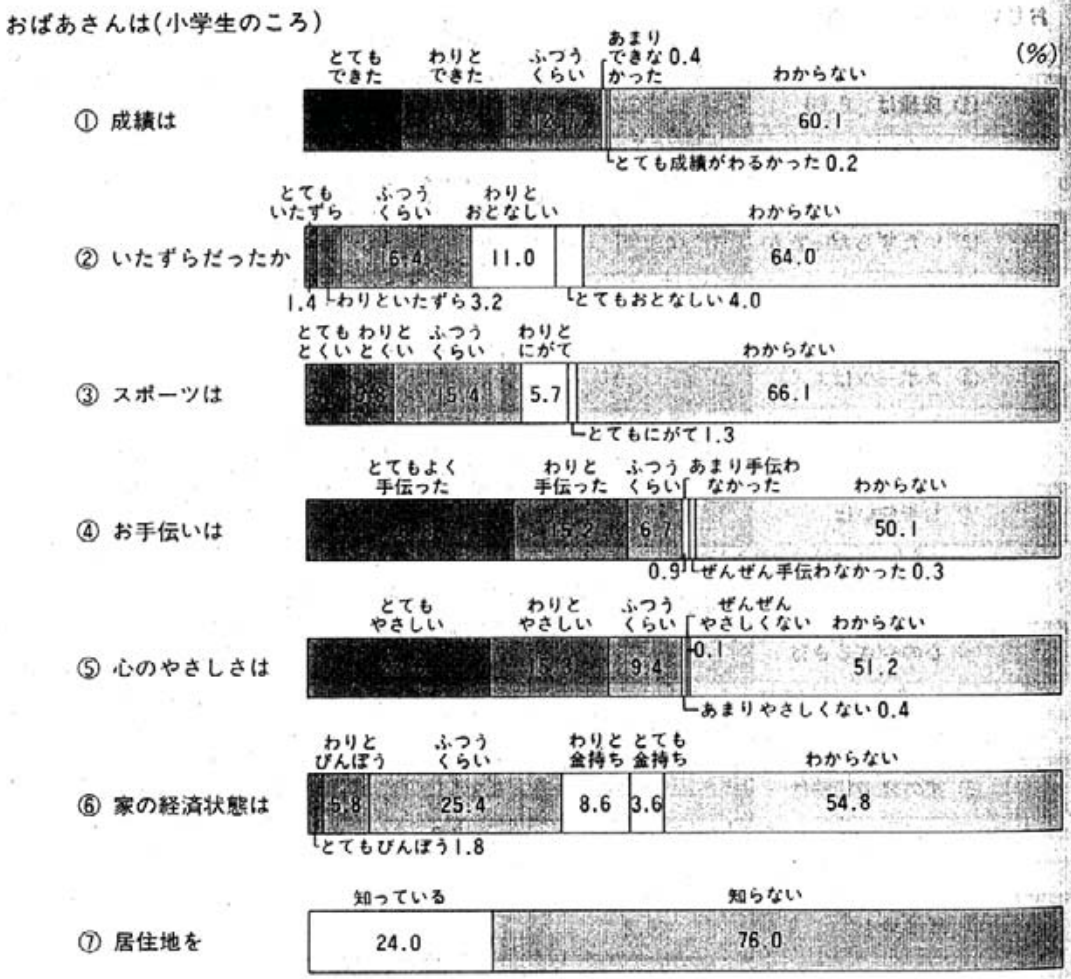


祖母　26.6%　12.7%　0.6%

となっていて、ふつう以上だっただろうと評価する者が圧倒的に多く、ふつう以下だっただろうと考えている者は、きわめて少ない。これは他の項目についても、同じようにみいだされる傾向である。このことはとりもなおさず、日本の老人たちが、少なくともその孫たちからは、現在の姿を概して好意的に評価されていることを示すものではなかろうか。

図が示すもう1つの点は、4人の祖父母たちに対する評価に、それほど大きな偏りがみいだされないことだろう。祖父と祖母で部分的に多少の評価の違いはあるものの、差は大したものではない。もっとも4人のうちではわずかに母方の祖母に好意的な評価がされており、「成績が悪かった」「優しくなかった」とする者は4人のうちで一番少なく、逆に「とてもよくできた、優しかった」と最上級の評価をする者は、他の3人の場合よりわずかに多い傾向がみられる。しかし、この点は後に他のデータを使ってくわしくみていくことにしよう。

図14・祖母のイメージ（母方）

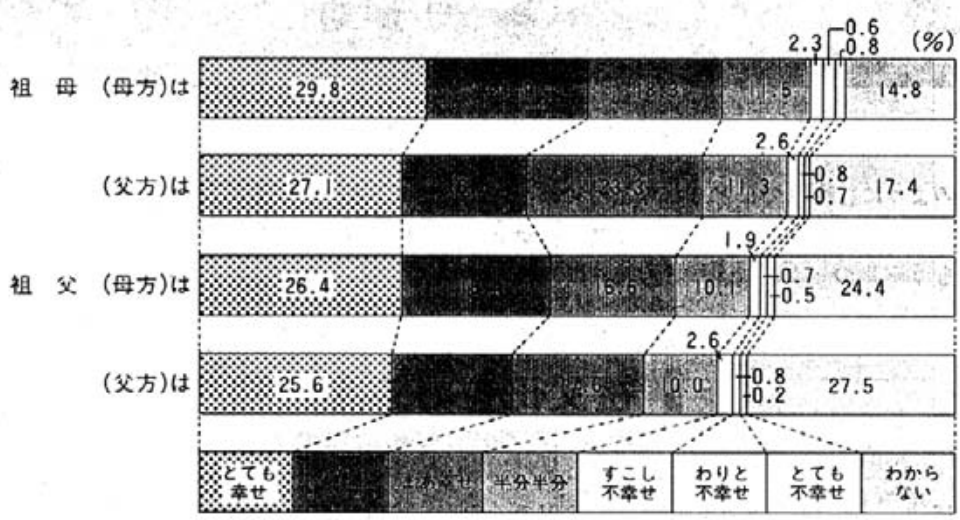


祖父母は幸せか

このようにデータをみてくると、現代の祖父母たちは、孫たちからその生きてきた道を理解されているとは言いがたいが、しかし多分に敬愛されているとはみてもよさそうだ。老人と幼い者たちの関係としては、まあ幸せな姿があるとも言えるだろう。この点は子どもたちの反応にも表われている。「あなたのおじいさん、おばあさんは、今、幸せですか」（生存者のみ）とたずねられて、子どもたちは図15のように答えている。

ここでは「わからない」が以前のデータとくらべて大きく減り、「幸せ」な老後という見方が圧倒的にみいだされる。「とても幸せ」はほぼ4人に1人、「かなり幸せ」を含めると、4～5割の祖父母が、積極的な評価をされている。欧米と違って、なんといっても親子の間の情愛のこまやかな日本では、子や孫に囲まれて、まあまあ幸せな老後を送る人びとが多いというのは、このデータからも言えそうだ。

図15・祖父母はいま、幸せか



3. 祖父母は愛されているか

このように、今日の子どもたちと祖父母との関係はまあまあのものと言えそうだ。しかし、もう一歩つっこんで、子どもたちに「祖父母を愛しているかどうか」ストレートにたずねてみることにしよう。

祖父母を好きか

図16は、「おじいさん、おばあさんをどのくらい好きですか」（死んだ人についても思い出があればそれについて）とたずねた結果である。図が示すように、全体としては、「とても」または「わりと好き」と答えた者が圧倒的で、「半分半分」もしくは「嫌い」と答えた者はごくわずかでしかない。

さて先ほどから、なにやら4人のうちでは、母方の祖母が他の3人よりもやや愛されている気配も感じられたが、ここで、なおよくみてみることにしよう。

図16では、一見すると、「母方祖母、父方祖母、母方祖父、父方祖父」の順に好意がもたれているようだが、よくみると4人の生存率に違いがあり、生きている祖父母だけについてみれば、それほどの差はなさそうだ。

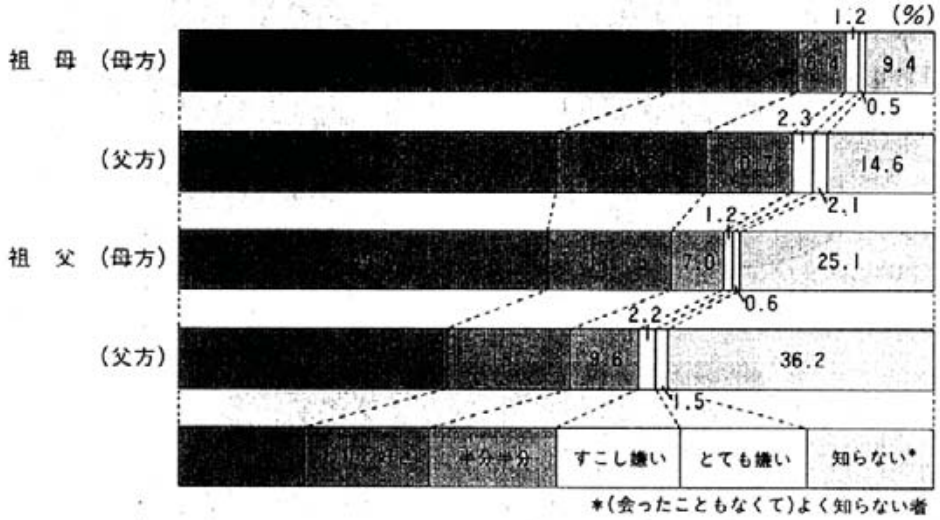
そこですこししつこいようだが、「4人のうちで一番好きなのは」を選ばせた結果が図17である。全体として、祖父よりも祖母のほうがより好かれており、なかでも父方より母方のほうが愛着をもたれている傾向がある。しかしこれも、死んでしまった人たちより生

きている人のほうに分があるのは当然なので、図でみるほどの差が祖父と祖母の間にあるわけではなさそうだ。

しかし図の下部にみいだされるように、男子と女子では多少傾向に差がある。男子は女子より同性、つまり祖父を好む率がやや高く、女子は男子より同性である祖母を好む割合が高い。

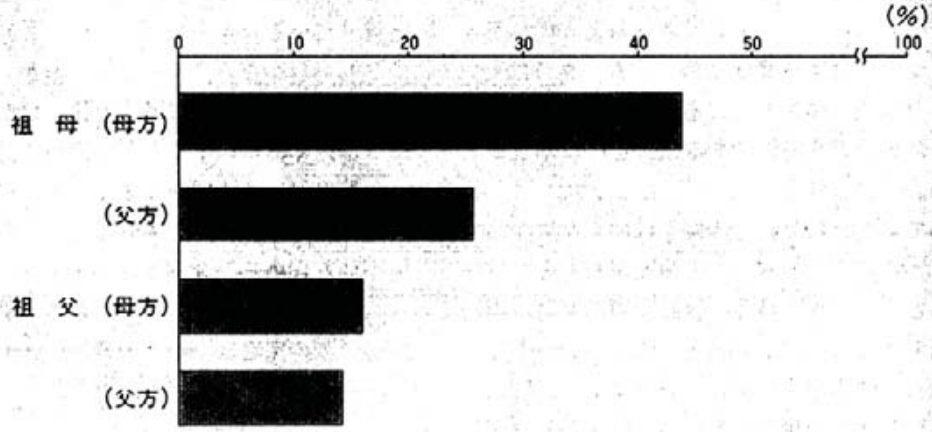
さて老人と孫たちとの関係は明らかになってきたが、子どもの親たちと祖父母たちとの関係はどうだろう。世間の嫁姑間のトラブルの例を考えても、相手の親との関係はとかくむずかしい要素を含むもののようである。図18は「お父さんお母さんは、おじいさんおばあさんを好きですか」と子どもにたずねた結果である。子どもの目からみて、相手の両親とうまくいっていない(とても嫌い・すこし嫌いと言っている）ケースは、父親で3％、母親で7％でしかない。もっとも、「わからない」と言っているケース（多くは祖父母が死亡）が3割近くあるので、それを除いて計算すると、嫁と舅・姑の間がうまくいっていない割合は1割程度。「半分半分」という何やら軽い不仲も含めると3割くらいということになる。少なくとも子どもの目からみた限り、全体の7割の家庭は、相手の親たちともけっこうまくいっていることになる。

図16・祖父母をどれくらい好きか



*(会ったこともなくて)よく知らない者

図17 いちばん好きなのは



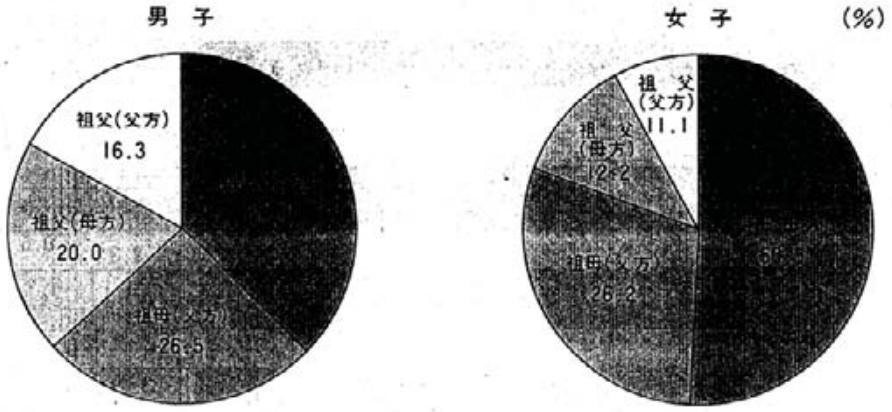
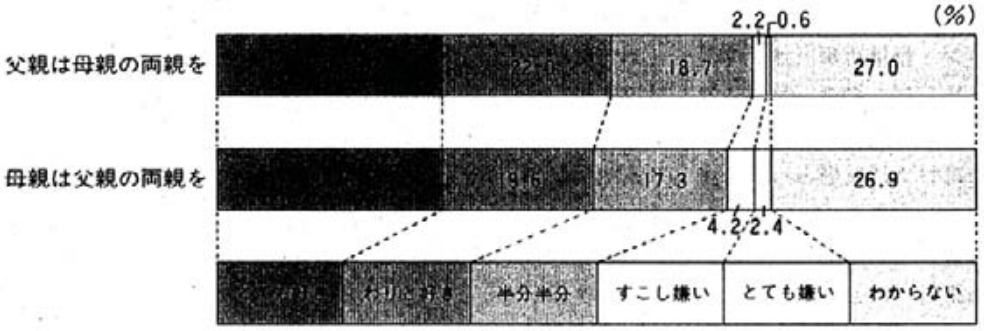


図18 父母は相手の両親を好きか



祖父母と一緒に暮らしたいか

以上のように、子どもたちと祖父母、また親たちと祖父母の、まあまあ幸せな関係をみてきたわけだが、それでは子どもたちに、祖父母とどのような距離で暮らしたいかを、たずねてみよう。(現在同居しているか、離れているかにかかわりなく希望を聞いてみた)

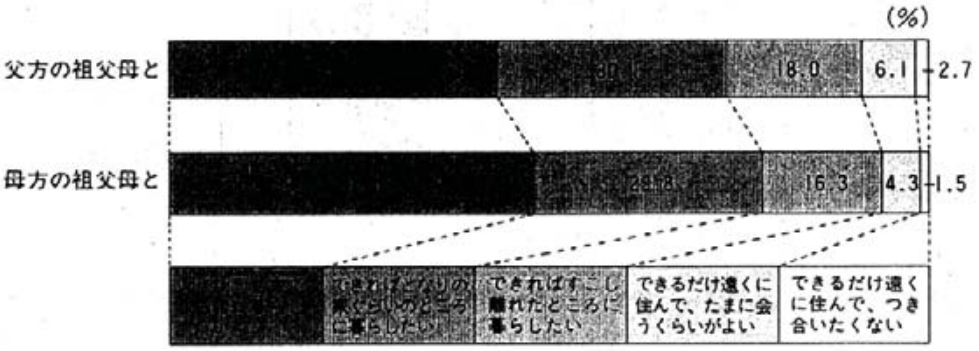
図19に示したように、父方の祖父母とは43%、母方の祖父母とは48%が、一緒の家で暮らしたい、と言っており、わずかではあるが、ここでも母方祖父母のほうに分がある傾向がみいだされる。また同居の希望は巻末の集計表にあるように、父方祖父母とは男子45%、女子41%、母方祖父母とは男子47%、女子49%と、僅少だが同性の親側の祖父母への愛着がみいだされるのもおもしろい結果である。

しかし図20に明らかなように、祖父母との同居の希望は、学年と共に明らかに減少していく。父方祖父母では、4年生から5年生にかけて48%から46%へとわずかに減り、さらに6年生では36%へと10%もの減少を示す。同じく母方についても、55%から48%へ、そして42%へと順次数字が減っていく。孫が祖父母にもつ愛着は、孫が幼いころだけのもので、やがて老人の老人的特性はしだいに幼い者たちの心をひかないものになっていくのだろうか。ちなみに巻末の集計表をみると、図16に示した「祖父母を好きか」でも、4年生、5年生は大きな変化はないが、6年生になると「とても好き」な者は大きく減ってしまう。たとえば父方祖父については、37%から29%へ、母方祖父は56%から44%へ、父方祖母54%から42%へ、母方祖母71%から59%へという具合である。

しかし多少の救いは、現在祖父母と同居している子どもは、やはり「祖父母と一緒に住みたい」とする者が、他をひき離して高い率になっていることだ。図21に示されているように、7割が同居の継続を望んでいる。しかし、現在遠くの町に祖父母がいる者で、同居を望むのは3～4割にすぎない。

おもしろいのは、同居しているかどうかと図16に示した「おじいさん、おばあさんを好

図19・祖父母と一緒に住みたいか



きですか」に対する反応はほとんど関連がみられないことである。表1は、母方の祖母の場合について、祖母が現在どこに住んでいるかとの関連をみてみたものである。表の数字が、やや同居より別居している場合のほうが、「好き」としている者が多いが、その差は僅少でしかない。他の3人の祖父母の場合は、もっと関連がみいだされない。

すなわち、祖父母に対しての子どもたちの気持ちは、その祖父母の人となりや孫との接触のしかた、家庭のしつけなどの総合されたもので、同居の有無にはあまりかかわりがないということだろう。われわれははじめ、近くに暮らす場合は、お互いのアラがみえて、祖父母を好きでないものが増え、遠くに離れると、愛着が増すのではないかと考えていたが、かならずしもそうではないことは、表1の結果からもわかることである。しかしそうした祖父母への好意の有無とはあまりかかわりなく、同居している子どもは、やはり同居がいいと考える。老人と幼い世代との調和的な関係は、やはり近くに住むことから始まると考えてもよいだろう。そして幸せなことに、かなり多くの子どもたちが、祖父母の近くに住みたいと考えている。現在同居している者はむろんだが、遠く離れて暮らしている者たちも、図21によれば、「同居」と「近所で」を合わせた割合は6～7割に達している。

高齢化社会の中での老人たちの生き方については、住宅施策も含めて、もっと考えていかなければならない課題であろう。

図20・祖父母と同居したいか×学年

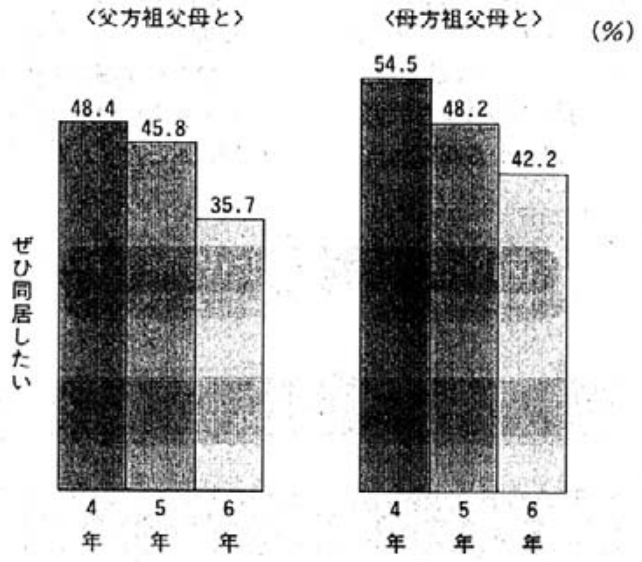
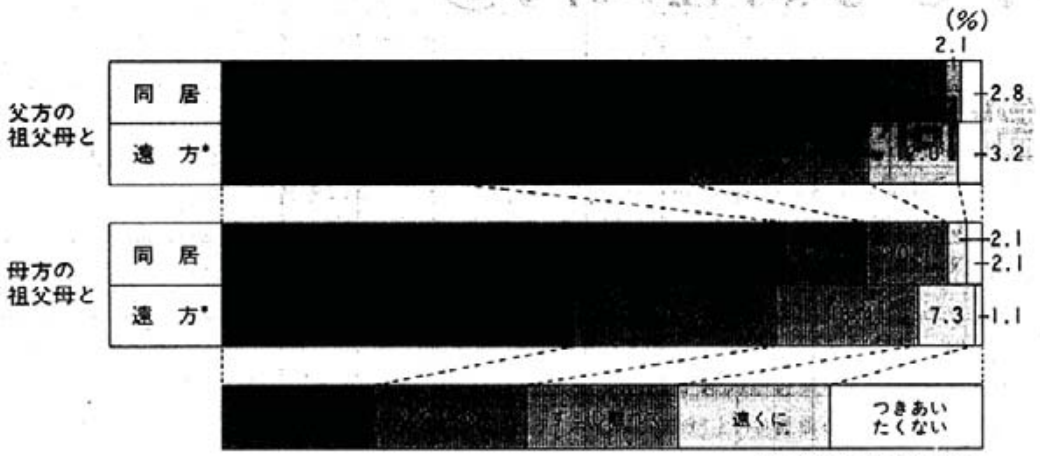


図21・祖父母と同居したいか×祖父母の住む場所



*遠くの町に住んでいる者

表1・祖父母の居住地×(母方)祖母を好きか

(%)

同居	近くにいる	いなかにいる	遠くの町に	その他
82.3	88.1	85.7	89.6	87.3

数字は「とても・わりと」好き